

決めつけしないで

それってホントに認知症?

吠えやおもらしなどの問題行動が始まると、認知症を疑う飼い主さんは多いもの。叱らず、「おかしいな?」と思ったら、まずは動物病院で相談して、愛犬の状態を理解しましょう。

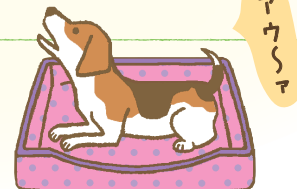


「吠え続ける」

夜鳴きをするからといって認知症とは限らず、「鳴く」という行動には「自己主張をする」という意味も。寝ていて腰が痛かったりする場合や、腸の機能低下によるお腹の不調、眠りが浅くなり起きてしまう、また寂しいといった理由から鳴き続ける場合があります。主張を探り不快な原因を軽減し、愛犬に合った対応を見つけていきましょう。

認知症の症状とは?

昼夜逆転して、夜中に単調な声で意味もなく鳴き続け、静止しても鳴きやまず、日本犬では「アウ〜ア」という独特な鳴き方で、ほぼ同じ一定の間隔で断続的に鳴き続ける、といった特徴があります。



「呼んでも反応がない」

呼びかけに反応をしなくなったり、お迎えにこなくなることも。性格が変わったようにも見えますが、老化による聴力低下の場合が多いです。顔を覚えて気づかせたり、ジェスチャーで伝えたり、安心感を与えてあげましょう。

認知症の症状とは?

認知症になると、ぼーっと一点を見つめながら、上の空で無表情になることがあります。喜怒哀楽がなくなったような顔つき、無反応、感情がよめなくなるように見えるのが特徴です。



ワンポイントアドバイス

夜鳴き対策には

二重サッシにしたり、吸音シートで防音対策。



普段と違う様子や行動がみられても、全てが認知症とは限りません。膀胱炎でおもらしが増えたり、まっすぐ歩けなくなる前庭疾患などの「病気」、加齢に伴い現れやすくなる「問題行動」の場合も。また、認知症が疑われても、ショックで受け入れられないことがあります。しかし、事実を受け止め、少しでも愛犬のためにできることを考えましょう。動物病院を受診して症状を遅らせたり、生活環境を見直したり、早めに適切な対処をすることが大切です。

こんな変化は見られませんか?

老化のサインをチェック!

高齢期になると「歩きにくい」「これは苦手」など色々なサインを出しています。いつもと違うサインに、いち早く気付いてあげられるのは、一緒にいる家族だからこそ。愛情のある観察が、健康で長生きのヒケツです。



お話を伺ったのは



ペットケアホーム リュッカ
安部 里梅 先生

動物看護師歴20年の老犬介護のプロ。動物病院と連携した、訪問介護・デイサービスなど愛知県を中心に運営。

✓ 足がぶるぶる震えたり、よろけたりする。



筋力が衰えて踏んばる力が弱くなるため、フローリングなど“滑りやすい床”に気をつけて。滑りにくいマットを敷くだけで、歩きやすくなります。

✓ トイレに間に合わない、おもらしが増える。



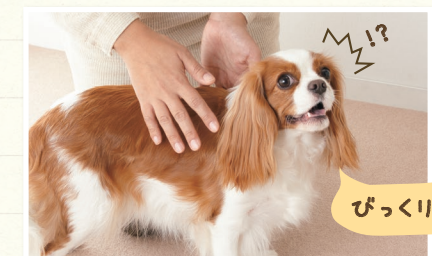
おもらしが増えたり、頻尿になることも。トイレを近くに置いたり、タイミングを見て連れて行くなど、やさしくサポートを。膀胱炎の疑いがないかも注意しましょう。

✓ 下り階段をためらう。段差がまたぎづらい。



四肢が弱り、ふらつきや関節の痛みで、昇り降りやジャンプが苦手になることも。階段のある家は1階に寝かせたり、段差にスロープを設置して安全対策を。

✓ 急に触ると驚いて、キャンと鳴く・噛む。



老化で視力・聴覚が低下すると、感知能力が下がるため、周りの様子が分からずぼーっとしたり、少しのことで不安がって鳴いたり、噛む仕草をみせることも。触れる前には、大げさに声をかけ予告してあげて。

ワンポイントアドバイス

10歳を過ぎたら“観察”と“書き留め”が大切。

早めのケアが大切ですが、どんなサインが出るかは愛犬によって様々。カレンダーや日記に、いつもと違うことや、おかしいと感じた出来事を書き留めておくと、傾向が分かり、初期ケアに有効です。愛犬に対し「どうしたらいいか」より「自分ならどうしてほしいか、どうしたら楽か」で考えると、自然に最適な方法が見つかります。



カレンダーに書き留めたり



愛犬用のメモ帳をつくら

